

然的宗教にシェリングは超自然的宗教を対比する。超自然的宗教と自然的宗教とは互いを前提し合い、補完し合うものである。というのは、根源的関係を人間が意志して破棄したことに對し、自然的宗教が意識の異常な状態を自然的過程により修復するとともに、関係破棄について神が如何に考えているかを啓示することによって、つまり「自然ではない……異常な関係と説明される」啓示に基づく宗教によって、神の意志と人間の意志とを和解させるためである。

シェリングは自然的宗教(神話の宗教)と超自然的宗教(啓示に基づく宗教)とを「非学問的宗教」に分類する。それに対し、「学問的宗教」に「自由な哲学的認識の宗教」すなわち「哲学的宗教」を所属させる。この「哲学的宗教は存在しない。しかし……先行する諸宗教を把握する宗教」であって、自然的宗教と超自然的宗教とを媒介するものとして存在し、それらの「真の歴史的關係において初めて描かれる」。この意味で、哲学的宗教は自然的宗教と超自然的宗教とを媒介するとともに、両宗教の意味を明らかにする「真の宗教」、真の神との根源的關係を回復する「全人類に共通の宗教」であり、シェリングにとっての「あるべき宗教」である。哲学的宗教はいわゆる自然的宗教ではないが、自然な宗教原理から自然に生まれた宗教を前提にし、その構成原理を配置し直す超自然的宗教を媒介することからして、「人間の生存の根底に宗教的なものを肯定する」という意味で自然的宗教ということが出来る。この意味でレッシングとシェリングにおける自然的宗教は一致するが、積極的宗教に関する解釈には違いが見られる。

サンタヤーナと自然的宗教

庄司 一平

宗教という理念及びメタ宗教現象を表す自然的宗教の概念は理念的である点において実定的宗教から区別される。自然的宗教の啓蒙的な近代主義に對する「理神論」「不可知論」という反発感情を超えて、概念それ自体の宗教性に関する再帰的説明への自覚が芽生え、自然的宗教の類型化及び歴史化が進行しつつある。サンタヤーナは二十世紀初頭において、宗教の自然性と実定性の両面を見据えた上で、象徴としての宗教本質論を展開した。自らの宗教論自体も象徴的営為にすぎない、と自己離脱を繰り返しながら、である。

サンタヤーナは自らの實在論哲学において、「動物的信仰」なる用語を用いて現象学的な自然的態度を解説する。實在あるいは實在性を論理的かつプラグマティックに仮定することを「信仰 *faith*」と呼ぶ。半ば本能的、半ば人為的なこの「信仰」は、自然の秩序が独立したものであること、故に所与の事実として甘受しなければならぬことを教える。また、サンタヤーナは、万物が流転する「自然の領域」と、詩や宗教、想像力の世界を「空想の領域」と呼んで両者を区別し、人間精神が「生きるべきもうひとつの世界」として、宗教を「空想の領域」の中に位置づける。その徹底的な自然主義において、束の間「休日」における解放と気晴らしを賞与する「空想の領域」は、「自然の領域」を補完する従属的なものと見なされる。さらに、「宗教と詩は本質において同一」であるとして、宗教の機能を、人間が抱く理想や期待や憧れを現実世界に溢れる様々な経験的

素材をもとに詩的あるいは象徴的に表現することに見出す。つまり宗教とは、想像力を媒介とした、人々の熱望や欲求についての自然発生的な表現形態の一つである。宗教と詩の決定的相違点は、詩はあくまで「空想の領域」に留まろうとするのに対して、宗教は人間の経験や現実―つまり「自然の領域」―にまで踏み込んでしまいがちだということにある。

自然主義に基づく象徴体系としての宗教というサンタヤーナの見解においては、宗教として象徴される理想や完全性は有限で相対的であり、その実現や完成はどこまでも不可能なものである。そして人々は、この不完全で有限な完全性を合理的で満足ゆくもの、美しいものと感じるのだという。このように限界づけられた宗教をサンタヤーナは「人間性の宗教」と呼ぶ。人間の本性的な惨めさと罪悪は、善の光によって照らし出され、神的なものへ接近する唯一の契機となる。人々に展望を示す善という理念は、元来「空想の領域」に属し、しかも、人間が生きてゆく上で刺激され促進される必要のあるものだという。

如何なる宗教的象徴群も、美の本質を含むが故に、愛すべき、受容すべきものである。愛という行為は、あるがままの対象それ自体だけでなく、その潜在的な善及び幸福の可能性をも含めて愛することであり、故に真の愛は試練を伴う。サンタヤーナは、(スピノザ倫理学におけるような) 現実には到達できそうもない普遍的な善を、想像的・詩的に変換・昇華することと情緒的に満足させようと試みる。人間を神々に対する崇拜へと促す本能的な熱望、これこそが「究極的宗教」であると結論される。

空想の応用可能性を含意しながら自然主義を徹底する、すなわち超自然の余地を極力排除するサンタヤーナの詩的宗教論は、「空想の領域」における、美と想像力の自由によって飛翔する宗教の象徴的特質を解説する。理想的な宗教は理想的な詩と同一であると見なされ、束の間の理想状態を描き出す。ただし、この宗教が象徴する理想はあくまで歴史的・文化的な制約を受けた不完全なもので、不完全だからこそ美しく愛すべきものとして評価される。そしてこの発想は、「空想の領域」を本能的に必要とする人間本性と、これに基づく自然的宗教へと通じていくのである。

ルドルフ・オットーにおける宗教と社会問題

藁科 智恵

ドイツの神学者・宗教学者ルドルフ・オットーは、その主著である『聖なるもの』において宗教的体験の記述・分析を行っており、その学術的議論を中心に論じられることが多いことから、彼が政治的な活動に関わっていたということは、意外な印象を与えるかもしれない。しかし、彼はプロイセン議会選挙に出馬、議員を務めるなど、政治にも積極的に関わろうとした。この時代のドイツは、十九世紀中期からの農業経済から工業経済への移行という変化に伴って生じた労働者問題を背景として、ルター派教会がこれまで持っていた宗教と社会の峻別が揺るがされるような時代であった。ルター派内部での社会政策の転換は、一八九〇年に「福音主義社会協議会」が設立されたことによって社会問題への対応が奨励されることになるという出